

はじめに

今回お届けする東京家政学院生活文化博物館年報では、平成30年度の展示活動の記録と、令和元年度の博物館実習報告及び研究ノート、事業報告等を掲載しております。平成最後の特別展では大正・昭和の婚礼衣装などの晴れ着を展示いたしました。近代の衣生活を振り返るとそこには日本における『創られた伝統』の事例が散見されます。その一つが婚礼衣装ではないかと思えます。ウェディングドレスが大勢を占める今日の結婚式事情の中にあっても、和装の白無垢や色打掛は日本の伝統的な花嫁衣装と認識されております。昭和のある年代までは白無垢で神前式をあげ、披露宴では色打掛にお色直し、さらに白いウェディングドレス、さらには華やかな色彩のカラードレスにお色直しを繰り返す『派手婚』がよく見受けられました。その後、教会式の結婚式が人気で洋装が主流となり、和装は人気薄に、ところが、近年では結婚式・披露宴とは別の日程に和装で写真撮影を行う『前撮り』という形式も多くなっているようです。「やっぱり日本人だから、伝統的な白無垢・打掛姿も」という文脈らしいです。伝統といっても神前式自体も明治33年に皇太子嘉仁親王（大正天皇）が行った神前結婚式がきっかけとなり、日比谷大神宮（現東京大神宮）などが一般庶民に、神前で結婚式を提供するようになったことに由来します。つい、100余年の歴史です。白無垢や打掛（搔取）なども庶民には縁遠かった小笠原礼法に起源を求められますが、大正時代には富裕層に受け入れられました。一方、黒地に華やかな模様の振袖は一般の人たちに婚礼の式服として広く好まれました。いずれにしろ、この時期の日本人の生活実態や経済的からみて、このような式服を眺めて結婚式を挙げたのは、限られた層であることを忘れてはなりません。そして、黒地の振袖が姿を消し白無垢・色打掛に塗り替えられていった背景について、私は昨今いろいろと考えております。本号の特別展報告をご覧になって、皆様にも興味を持っていただけたら幸いです。

今後とも年報をより一層充実させていきたいと、ご意見等いただけましたら幸いです。

2020年3月

東京家政学院生活文化博物館館長
山村明子